

「阪神・淡路大震災」から15年……

1月17日は阪神・淡路大震災のあった日で、今年は15年目といこともあるからか、ここ数日関連した番組がいくつかあり、やはり淡路島が故郷だけに、過去のことでなく毎年身近に思い起こされる。

あの朝、地震発生が5時46分だったこともありまだ寝ていたが、神戸の姉から既に故郷の兄、大阪の次姉の無事を確認していたようで「みんな無事だからね。」との電話で起こされた。

何事かとTVをつけると、広い道路をふさぐように倒れているビルの映像が飛び込んできた。

直ぐに姉に電話したがもう回線がパンクなのか電話は通じず。

時間が経つに連れ被害の大きさが次々とTVに映し出されたが、仕事もあり出勤したが「心ここにあらず」の一日だった（当時はPCでのインターネットも携帯電話もまだ十分に普及していなかった）。

あの日から4、5日は、帰宅してから親戚、親しい友人等に安否確認の電話をかけまくったが、何日目かによく通じるどころも。

幸いにも誰も死傷していなかった。

また、被災地間はおのこと電話が通じないようで、結果的に仙台の我が家が各親戚の安否を確認し、親戚間の安否状況を情報提供するセンター的役割であった。

2ヶ月後の3月に実家を見舞いに帰省したが、大坂→神戸間のJRはまだ寸断区間のある状態。

寸断区間のアクセスバスに乗るまでも長い行列で時間もかかり、やっと乗れても倒れた高架の高速道路の下の国道は渋滞で時間がかかったのを思い出す。

実家の隣の兄の家は大きな被害がなかったが、自分が生まれ育った古い実家は半壊だった（父は既に亡く、母は長期入院中だったので、幸い実家には誰も住んでいなかった。半壊の実家は、後日撤去）。

15年が経ち、確かに道路、町並み、ライフライン等は「復興した」と云えるだろうが、倒壊した家屋の下や燃えさかる炎の下で助けを求める親や子ども、きょうだいを目の前で亡くした方々の気持ちは、年数が経っても「心も復興した」とは到底云えないだろうなあと思われる。

ある番組で、震災で幼子を亡くした母親がインタビューに応じて「今も私達のことを忘れずに気にかけて下さることに感謝している。」という言葉の中に、震災の記録、記憶を語り続けることの大事な意味があるように思う。

こうした震災からの心の「復興感の上昇」とはどういうことか、考えさせられる15年目である。